クソッたれ人生録

そぅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クソッたれ人生録

【Ｎコード】
Ｎ８７５４Ｎ

【作者名】
そぅ

【あらすじ】
彼は殺しすぎた。それにより神に意図的に殺され別の世界に転生させられる。その世界で彼は何を思うか何を行うか、誰も知らない。作者はもっと知らない。
――っと現実逃避したい受験生が生き抜き程度に書いた駄文ですがよろしくお願いします。一応ｓｓ書くのは初めてなので処女作となります。
更新については、大変不定期になると思います。

prologue

――夜中、皆が寝静まったであろう時間。
良い子なら、安らかに惰眠を貪って寝ている時間。
――そして

「うぅ・・・ あぁぁぁぁああ」ガクガクガクブルブル

――悪い子が悪さをする時間でもある。

「ハーイ！ここで問題どぇーす！えっとぉ・・・ 問題考えるのだりぃなとりあえず今ここであなたは死にまぁーっす。」

悲鳴を上げ小さく縮こまって震えている
男に向かって未来を告げてやる。

「あーでぃおーす。」

俺は相手の懐に入り込んで脊髄に蹴りを放つ。

「あふん。」

――随分と情けねぇ声出して死ぬな・・・
男の首は壊れた人形のように折れ曲り、足元に倒れる。

「さーって後はコイツを処理してｔｔ『ちょっと君さぁ殺しすぎだぞぉ☆彡』あン？」

何だ？この声は？頭の中に響いてきやがる。

『悪い子はお仕置きだぞ！』

最近、疲れてんだよな。幼女の声が空耳で聞こえやがる…

『ぇっと．．．必殺その１３！スゥーハァー』

幻聴にしても…なんで幼女の声なんだ？
俺はロリコンだったのか？いや、現実逃避はそろそろやめるか…
これは幻聴じゃねェ。だが、それだったらこの声はどこから聞こえる？
周りには人っ子一人いやしねぇ…

『超絶ミラクルエナジースーパーハイパーウルトラマスターファンタスティック
エサキゾチックエロティックサドスティックボンバー！ハァハァ
（一気読み』

空が、桃色で染まる。正確には桃色の閃光で染まる。
幼女の息切れに興奮しながら、桃色の閃光に染まった空を見上げる。
ちょっと待て。こんな数の閃光が降り注いだら…さすがの俺でも、
お陀仏だ！

「は？ぇ、ちょおまなにそするやめｒくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」

桃色の閃光によって体が蒸発する。

きっと、今の俺を人が見たら確実にトラウマになる。自信がある。こんな状況でもくだらねぇことを考えれる自分に賞賛を送りたい。

『はぁはぁ・・・ 息切れで窒息死するかと思ったわ！神だからそんなくらいじゃ死ないけどねッ！』

「さすが俺の人生」

――クソッたれだぜ

ってことでなんか天から変な幼女ｖｏｉｃｅが聞こえたと思ったらいきなり桃色光線が振ってきたんだ
なにを言ってるかわからねーと思うが俺も何を言いたいのかわからない天変地異とか全面核戦争なんてレベルじゃねぇもっとおｓ（ｒｙっとまぁなんだかんだあって死にマスタ＼（＾ｏ＾）／

クソッたれ人生録　～　ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｎｅ　～【ｐｒｏｌｏｇｕｅ】

――あー、此処はいずこだ・・・

『ハーイ！ヘローヘロー人殺しサーン。』

さっき俺を変テコビームで焼殺した奴か・・・？

「お前も俺を殺しただろ…。」

自分のことは棚に上げやがったこの女ぁ

『神だからいいのです！エッヘン！』

無い胸を張って偉そうにしている自称神の幼女。

――そんな幼女に俺は…

「なにこのひとこわい」

――素直な感想を言ってやった。

『それにしても神様にむかってその口調はちょっとおいたがすぎるよぉー？私はエライんだぞー！』

しかし俺の素直な感想はお気に召さなかったようだ。
頬を膨らませながら怒ったように言う幼女。

――少し欲情しそうになっちまったじゃねぇか――

しかし、お前みたいな幼女に敬語を使えるわけねぇだろ。
だが、俺は紳士なのでキチンと敬語を使ってやろう。

「ワカリマシタゴッド。コレデイイデショウカ。」

『ちょっと片言じゃないー？喧嘩うってるのー？』

あぁ？まだ文句があんのか？こいつ…仕方ねェな…。

「ソンナコトアリマセンヨwwwwジブンチョウケイゴツカッテマスヨwwww」

『むむー！やっぱり喧嘩うってるのー！そんな人には、またお仕置きが必要だね！えいッ！』

性的なお仕置きなら大歓迎なんだがなぁ。

「はぁ？」

頭に、死が入ってくる。人の記憶か？
色々な人物の死が俺の中に、入っていくる。
友人に裏切られ殺される記憶、生きたまま臓物を引きずり出されて死ぬ記憶。
拷問され、男共に犯され、嬲られ、そして殺される記憶。
様々な記憶が一気に頭に流れ込んで来た。

「あｇｙｊぎｒこｂｌｇｆｒヒギィｇふぁうｊふぁせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」

不愉快不愉快不愉快やめろ不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快
不愉快不愉快不愉快
不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快消えろ不愉快不愉快
不愉快不愉快不愉快
不愉快不愉快キエロ不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快
不愉快不愉快不愉快
不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快不愉快ヤメロ
不愉快不愉快不愉快

『ありゃりゃー？やりすぎちったかー、テヘッ☆彡。しかたがないので心のひろーい私はこの辺で許してやるのですです！』

目の前の幼女が何か言ってやがる。

「て、てめぇ何しやがった・・・」

『ちょっとした精神汚染っですよぉ』

軽く言いやがってぇ…！犯すぞこの幼女が！

「何がちょっとだよ軽く１００パターン以上の死を見せやがって頭がアッパッパーになっちうじゃねェか」

いくら俺がクソッたれな人間だって言っても所詮、人間だ。限界はある。

人は、簡単に死ぬ。体にビームが当たったりなんかしたら体が蒸発

して死ぬ。
今の俺がいい例だな。
『実際なってましたけどねぇー。っていちいち数えてたんですかぁー？マメな人ですねぇ自分の殺した人の人数は数えてないくせにー。』
あぁ？何、変なこと言いやがるんだ？こいつ。
「自分が死んでいくわけでもあるまい赤の他人がどう死んでいこうが関係ない。」
そう、所詮は他人だ。何処でどう死のうと、俺には関係ない。知ったこっちゃない。
どんな奴でも、テレビで人が死んだとニュースがやっていようとそこまで感情移入はしねぇだろ？
それと一緒だ。俺にとって人が死ぬってのはその程度なんだよ。
『それがイケないんだぞぉー？ちゃんと死んでいく人の気持ちも考えないとね☆彡』
お前はどうなんだよ！俺の気持ちを考えて俺を殺したのか？言いたいことがありすぎて
喋るのもめんどくさくなってきた…
「知るか」
『もぉう頑固だねぇ、でもそんな子は嫌いじゃないぞぉ！つーわけでぇあなたを転生させちゃいまぁーす！』

何言ってやがるこいつ。

「はぁ？何ほざきやがｔｔｙ『口答えする子はメッだぞ！』・・・とりあえずどういう結論でそうなった。」

少し…かわいいと思った自分が恨めしい…。
もうロリコンでいいや、と思った数秒前の俺をセメント漬けにして海に沈めたいぜ…

『えっとね！えっとね！上の御偉いさん方が決めちゃったの！たしかぁーアイクルテン様！』

「誰だよ」

聞いたことねぇよ。こいつの上司って、どうせこいつと同じで頭が残念なんだろ？

『んー創造主様だったかな？何千柱と居る創造神の一番、Ｎｏ１、トップ！そんなお方！』

自分の上司ぐらい覚えて置けよ…。社会に出て、上司に向かってえ～と誰でしったけ？とか言ったら即クビだクビ。

「まぁ話はわかったソイツに合わせろ。転生なんてやってられるかまたパイパイ吸ってる赤子からやり直せ！？冗談じゃねぇ。」

羞恥心ぐらい残ってんだよ。俺にもよぉ

『でもそうしないと私が怒られるの！それに合わせろって言ったって創造主様のメルアドなんて知らないの！』

神様の世界も、随分と現代的になったもんだな。

「おいおい神様もメールするのかよ念話的なもの使うんじゃねーのかよ現代文化エンジョイしすぎだろ。」

そのうち、自宅警備員になる神様も出てくるんじゃねぇか？

『神様だってそれくらいするの！それでぇーそれでぇー転生の話だけどぉー別にぃーベイベーからやり直す必要もないんだよぉ？』

確かに、赤子からやりなおさなくても良いのは魅力的だ。

だが・・・

「たしかに赤子じゃないほうが良い・・・が俺は転生なんてしねーぞそのまま輪廻の輪に入れろよ」

そう、まだ俺は転生することを認めていねぇ。

俺はもう死んだんだ。桃色の閃光に貫かれて、蒸発した。

死人に死人らしく、俺みたいなクソッたれな人間は過去も、今も、未来も、

永遠に地獄を見れば良い。それが、世のため人のため。だろぉ？

『ダメダメダメェー！君にはちゃんとＩＦの世界に記憶を持ったまま転生して二度目の生を受けて反省してもらいます！それでも反省をしないようならまたその世界で死んだ後、辛ぁーいゾンビチックな世界で独りになってもらいます！』

独りってことは仲間を作るなってことかぁ？

いや、それよりも…

「ＩＦの世界・・・？」

『えっとねＩＦの世界っていうのはね名の通りもしもの世界、もしも魔法があったら、もしも自分が絶賛ハーレム中だったら・・・これはちょっと違うかな？まぁそういうもしもの世界のことをＩＦと言うんだよ！　君達人間が作ったマンガ、小説、ゲームなどもその類に入るね。』

『そういう世界のことを言うの。その世界でメチャクチャしようが被害が少ないからね』

暗に、メチャクチャにしても問題ないよ！って言ってるように聞こえんだが？
反省してほしいのか、暴れてほしいのかどっちなんだ。それにしても…？異能の力？か…。

「あぁハイハイおっかなビックリな人がたくさんいるんですねそんな世界もっとゴメンだね」

即効で殺されてリタイアする光景が目に浮かぶぜ。

『そぉ？おもしろいよぉー？』

お前が、だろうが。

「それは客観的に見ての話だ物語りは物語だからこそ面白いんだ。
それを現実に置き換えるな。」

当事者の事を考えやがれ。最初は、人の心を考えろ。なんて言って

たくせによぉ。
言った本人が即効で大否定してんじゃねぇか。少しは人の事を考えろ。

『もぉーいけずぅー。』

「何とでも言え俺はそんな世界、絶対に行かないからな。」

かわいく言えば、俺が堕ちると思うなよ！
少し心が揺らいだのは俺の気のせいだ。

『まぁ君がどう言おうと、どう反抗しようとも決まっていることだからしかたない。君だけ特別ってことは無いからね。とりあえず行くとしたら何か特殊能力？そんなのがあったらいいよね、さっき君に色々な死を送ったように私は死を司る神サリエルって言う神様だから君にあげれる能力は【直死】例えばね銃の弾丸に死の概念を籠めて殺したい相手に向かって撃つと相手は必ず死ぬという結果を生み出し過程はそれに合わせて動く因果逆転な能力だね！』

それは、また、随分と…

「――――チートすぎんだろ・・・ その概念は弾丸以外にも籠めれるのか？」

『できるよー、石、刃物、自分の肉体、って言ってもある程度殺傷能力がないとダメだけどねー、応用だけどナイフに相手との距離の死の概念を籠めてその場を斬りつければ一瞬にして相手の目の前までいけちゃうよー。万物、何にでも死という概念は存在するからね勿論神様にもあるよーまぁ神を殺せるのは同じ神か神喰いくらいだけどね。』

「万能すぎんだろ・・・。」

そんな能力を俺みたいな人間にこう。簡単に渡して良いのか？
やっぱり暴れてほしいのか？俺に殺戮ショーを期待してんのか？
そんな相手を殺すためだけに特化した能力を渡そうなんてよぉ。

『それじゃあ送るよぉー！行き先はランダム！行ってからのお楽しみ！』

俺の周りが光りだす。
ちょっと待て。まだ転生するなんて言ってねぇだろ！
その他諸々話があんだよ！

「ぇ、ちょおまやめｒ『えいっ！』

ささやかな俺の抵抗もむなしく…
瞬間、俺は光に包まれた…俺の死んだ原因となった閃光と、同じ桃色に。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・

ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

１話目から長くなってしまってすいません
作成にこんなに時間がかかるとは、思ってもみなかった。
主人公にロリコン臭がしますが
最初はロリコンなんかにするつもりなんてなかったんですよ？
ただそっちのほうが話しが作りやすかった・・・それだけです。
一応主人公の名前は次に出す・・・つもりです。

感想の方はアドバイス、批判、何でもいいんでくれると嬉しいです。

Transmigration

何だ？この高いところから落とされたような浮遊感？
まぁ高いところから落とされたことなんか一回もねぇがな。

「ッ痛！！」

着地に失敗して尻から落ちてしまった。
頭にまで響くような衝撃。
クソが、頭からだったら大惨事になってたんじゃねぇか？
こう、ここら一帯の地面に真っ赤なお花のアートを築き上げそうになっただったじゃねぇか。
軽い冗談だ。人間、たかが上空１０ｍから落ちても…死ぬか？

『どーう？無事に其方の世界にいけたかなー？まぁ私はこれからもちょくちょく君の前に現れる
　ことがあると思うけどその時はよろしく会話してちょうだいねー。
あでぃおーす☆彡』

こいつ俺が間違えて死んだらどうするつもりだったんだ？
最初に合ったときから思ってたが…アイツ…

「なんて自己中野郎だ．．．」

それにしても．．．

「――――ってかここ何処の世界だよ．．．。」

先程、俺が人を殺していた殺人現場でもない。

今うるさく俺の頭に話しかけている幼女と、話しをしていたところとも違う。

「とりあえず図書館あたりにでも言って情報を探すか・・・ってさっきから思ったが妙に視界が低いな・・・どうなってんd・・・」

何だ、この違和感…もしかして…

「――――は?・・・・・・・・・なんだってガキの体なんだよォォォォォォォ!」

クソッたれ人生録 ～ episode two ～【Transmigration】

赤子じゃないって聞いて安心していたが、これは不意打ちすぎる。
まさかガキの体になっちまうとは・・・
これまだ１０歳、越えてないだろ！？

――まぁ悩んでもしかたねぇか、文句は今度アイツが出てきた時にでもすれば・・・
そんなことより今は図書館を探さねーとな
見た感じ結構発展してそうな町だ、図書館の一つや二つくらいあるだろう。
ん？あそこに何か落ちてんな。

「あ？なんだコレ」

青い、いや蒼い宝石だ。中々の大きさだが、おそらく・・・見覚えの無い宝石だな。

「おー、これ売ったら中々金になるかもなここが、トンデモ世界なら護身用にナイフや銃くらいほしいところだが
なんせこの体だからな手に入れるのも難しい・・・まぁそんなモノより今は食料の調達の方が重要だ。」

「――つっても何処に宝石店があるのか何て知らないからな・・・
そこら辺の人にでも聞くｋ「そのジュエルシードを渡してください」
あ？」

後ろから声が聞こえ振り向いてみると…
夜の街によく映える、金髪の少女がまるで死神のような格好をして佇んでいた。
初対面だが、俺は彼女を知っている。前の人生・・・前世の記憶で、

だ。
昔、外に出て殺しをするのもめんどうでなんとなく
夜にテレビをつけていたら深夜アニメが放送していた。
「魔法少女リリカルなのは」という題名のアニメだ。一発でハマッた。無印とA' sだけだが。
この金髪で露出の激しい幼女は、間違えなく《フェイト・テスタロッサ》だ。
そのフェイトが俺に、ジュエルシード渡せと言った。なるほど、さっき拾った蒼い宝石はジュエルシードだったって訳だ。
まぁ小難しいことは置いておいてだ、本物のフェイトに会えたんだ。
多少、からかって
慌てるフェイトの姿を見て楽しまないと…損だろ？

「随分と愉快な格好しているな嬢ちゃん、これがほしいのか？」

「あ・・・はいソレを渡してください。」

大胆な格好の割りに、控えめに俺の言葉に返事をする。
謙虚だねぇ。でも…

「渡してくださいと言われ、はいどうぞとやれるほど俺もできた人間じゃない。やはりココは取引といこうじゃないか。」

「あ、はい・・・？」

困惑した様子のフェイト。
やはり、俺の見立て道理、クルものがあるな…。
破壊力が半端じゃねぇ。

「えっと、ジュエルシードだったか・・・？コレに似合う額の金を

くれれば俺は喜んでコイツをアンタに差し出そう。」

金がねェと生きていけねぇんだよ。
てなわけで、いくら相手が幼女だって言っても金をださねェと
宝石はやれねぇぜ？

「お金と交換って・・・どれくらい必要ですか？」

宝石に詳しいわけでもない俺がわかる訳ねぇだろ。
しかも、ジェルシードはこの世界に無い宝石だ。
どれぐらいの価値があるのかもわからねぇ。

「そんなことは俺も知らんわ。なんせ見たことも無い宝石でな・・・
じゃぁ１０万くらいくれよ。
アンタみたいな子供には用意できそうな金じゃないが、なんせ家
も頼れる人もないからな
金だけが俺の最大の味方なんだよ。」

「わ、わかりました。それじゃあ私の家に来てください。」

私の家に来てください…だと…。
ってことこは【自主規制】や【１８歳未満閲覧禁止】みたいな事を
期待していいんだな？

「あ、あいよ。」

「あ、あの、あなたのお名前は・・・？」

言ってなかったか？

「あぁ黒谷・・・黒谷氷我（クロヤヒョウガ）だ。」

To be continued・・・

Transmigration（後書き）

主人公の名前が厨二すぎるｏｒｚ
名前考えるの苦手なんだよなぁ・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8754n/

クソッたれ人生録

2010年10月10日04時25分発行